

Design Management project

県デザイン経営塾8「ひとをつなぐまちを創る 氷見スタイル講座」

富山県・富山大学芸術文化学部・氷見市 連携事業

富山大学芸術文化学部准教授 沖 和宏



開催主旨と概要

“御役所仕事”という言葉があります。そもそも地方自治体の本分は「税収の公平かつ意義のある再配分」の執行ですが、この“意義”への不満や不信を市民から少なからず耳にします。それは“事業の執行”と“事業の意義”が一体とならない場合に生じます。例えば“公平”という言葉に執着し、早急に対処すべき問題であっても“等しい再配分”に固執し、いたずらに時間を浪費するといったことです。そこにデザインマインドはありません。なぜならばデザインマネジメントそのものが、“執行の意義”を創出する行為に他ならないからです。

ならば、意義のある“御役所仕事”を地域へ還元しよう、というのが『デザイン経営塾8』のひとつの側面です。今回の実行委員会は5名の氷見市職員で構成し、各担当部署の切実課題を掲げ、その一助となるセミナーを企画しました。彼らは必要課題として“広報伝達、まち歩き、魚食普及、観光振興”という4つのテーマを選び、市民と共有して学ぶべき情報やスキル、教養は何かを調べ、教材を研究し、最適な講師を選し、より活発な意見交換や検討を誘発するセミナープログラムを設計しました。結果的にこのセミナー企画が、実行委員の“学び”となる狙いです。

実行委員が企画したセミナーは、各テーマに関連する事業者や市民団体、商工会議所、観光協会の職員、関連の市職員に開講され、時には地元大学生や一般市民を交えた“地域ぐるみの学びの場”を創出しました。これが本事業の第2の側面であり、本来の姿となります。

事業実施後は、各セミナーで共有した学びが風化せず、次の地域交流や運動の継続に繋がるように、セミナー参加者の記憶を呼び覚まし、不参加の方々が読んでも臨場感のある参考書となり得るべく、できるだけ詳細な実況記録として報告書をまとめました。

企画

主催：富山県、富山大学芸術文化学部

共催：氷見市

プロデューサー：武山良三（富山大学芸術文化学部）

実行組織

県デザイン経営塾8 実行委員会

実行委員長：沖和宏（富山大学芸術文化学部）

委員：舩田建治（氷見市 企画振興部 企画政策課 市民の声・広報担当）

神代太（氷見市 建設農林部 都市計画課 都市計画担当）

伏喜マリエ（氷見市 企画振興部 漁業交流施設整備推進室）

鶴谷宗弘（氷見市 企画振興部 商工観光戦略課 観光戦略担当）

五十嵐裕之（氷見市 企画振興部 企画政策課）

※所属部署、担当は実施当時のもの

プログラムとスケジュール

プログラムは、以下に記す4つのセミナーで構成されました。これらが年度末に集中開催された理由は、実行委員の学びの場ともなる実施計画に、綿密な検討と準備時間を割いたためであり、記録に残るだけでも5ヶ月の間に15回のミーティングが開催されました。

セミナー①

「思いが伝わるチラシづくり&かしこい印刷発注術講座」

講義演習と印刷業者との意見交換会

日時 2014年1月24日（金）14時～17時

場所 氷見市役所 第2・3委員会室



セミナー②

「氷見の世間遺産発掘—まちを歩けば、何か見つかる—」
講義とフィールドワーク

日時 2014年2月12日（水）13時～17時

2014年2月13日（木）10時～17時

場所 氷見市いきいき元気館 大会議室

ひみ番屋街～商店街エリア（フィールドワーク）

セミナー③

「氷見の者（もん）ならもっと魚食べんまい！ネットワーク」
講義とトークセッション

日時 2014年2月18日（火）18時～21時

場所 漁師番屋迎賓館（阿尾漁港地先）

セミナー④

「氷見温泉郷の未来を創造しよう」

講義と行政による問題提起、および自由討議

日時 2014年3月6日（木）13時30分～16時50分

場所 氷見市ふれあいスポーツセンター第3会議室

セミナー①

「思いが伝わるチラシづくり&かしい印刷発注術講座」

市民と行政がともに市政をつくるまちづくりにおいて、市政の情報公開（見える化）は最重要課題です。行政発信の広報誌（紙）やイベント告知のチラシ、講演会や地元説明会での資料など、あらゆる場面での情報発信には、分かりやすさと、見たくなる紙面づくりが求められます。特に高齢者のみの世帯が多くなる近年では、事業をわかりやすく説明する工夫が一段と必要になっています。この講義演習では、チラシ制作を題材にした伝わる情報整理術の基礎研修と、印刷物を発注する者の心得や知識、校正力の習得を、行政、地元商工会議所や観光協会、各種事業者、一般市民に広く開講し、各機関の資質向上を図りました。

第1部 講義演習

「思いが伝わるチラシづくり 基礎編」



講師：

フリーライター、セミナー・プランナー

吉田清彦氏

伝えるべき情報を「もらさず記載する」行為から「読んでもらえる」行為への意識変換が、このセミナーの講習目的でした。講師の吉田氏は、所謂デザイナーとしての評価の外で活躍し、大衆に確実に伝える事に対して、実績と評価をもつキャスティングでした。つまりある種の訓練を必要とするデザイン・スキルのセミナーから脱却し、スタイリングが例え悪くても、人というものは何に興味を持ち、情報がどのような条件をもつと、理解し、行動喚起へと繋がるのかを、大衆レベルで実行できる教養と方法論の涵養に重きを置きました。

第2部 印刷業者との意見交換会

「デザイン力の導入法と印刷業とのお得な関係づくり」



業者代表：

印刷業 営業、プリント・マネージャー

高岡剛氏

コーディネーター：

デザイン経営塾代表

沖和宏

デザイン性は高いに越したことはないけど、自分にデザインはできないし、印刷所は刷る仕事。デザイナーに頼めば高額な対価を要求される。といった固定観念を払拭し、デザインや印刷業界の内実を正しく理解すると共に、限られた予算の中で、いかにデザイン力を導入できるか、という業者活用の方法論を共有しました。



セミナー②

「氷見の世間遺産発掘—まちを歩けば、何か見つかる—」

平成24年秋に、氷見市の新たな大型観光拠点として『ひみ番屋街』『総湯』がオープンし、多くの集客を実現させています。しかし前身の『海鮮館』開業時より問題視されていたのが、まちなかの観光拠点や中心商店街からの観光客流出であり、観光客の徒歩によるまちなかへの誘導が経年の課題となっています。

このセミナーでは実地演習を行い、まちなかへの観光客誘導を長期的に見据え、まずは誘導の核となる新たな観光拠点の発掘と、散策・回遊ルートの検討、それに付随する観光地としてのイメージ創造を図りました。

第1部（1日目）

講義とミニ・フィールドワーク

「世間遺産—気づき・磨き・繋げる—」



講師：

NPO 法人 まちづくり地域フォーラム・かごしま探検の会 代表理事
東川隆太郎氏

大都市や、特異な地方都市の成功事例のコピーに陥りがちな「まちの魅力再生プラン」において、その土地に住む者達へ、まちの風土に立脚した独自の視点を与えることが、このセミナーの目標でした。東川氏は「世間遺産」という新しい視点で、地方都市の魅力再生に実績のある講師。まず講義によって、観光の魅力抽出視点を理解し、実践的にその視点を養うフィールドワーク（翌日に実施）の予行演習として、ミニ・フィールドワークを行いました。

第2部（2日目）

フィールドワーク「氷見の界隈めぐりと価値の発掘」

演習「氷見の世間遺産発掘と観光ルートづくり」

氷見市の観光に関わる行政、商工会議所、観光協会、ボランティアのまち歩きガイド団体、そして地元以外の視点として、富山大学芸術文化学部学生有志によって3つのグループをつくり、まち歩きをしながら、見慣れたまちに内在する物象や事象を収集し、その後の演習で、具体的なテーマを持ったまち歩きコースの作成を行いました。



フィールドワークで作成されたまち歩きコース



セミナー③

「氷見の者(もん)ならもっと魚食べんまい！ネットワーク」

日本の食文化は、魚食と共に魚価の維持があったのですが、近年の魚離れから、魚の消費量の減少と魚価の低迷が問題となっています。氷見は昔から、魚の身や骨から内臓まで、様々な料理や出汁として使う魚食のまちでしたが、魚離れはご多分に漏れません。このセミナーでは、氷見市の魚食産業と観光を支える関係者を受講生として招き、氷見の水産業の現実と危機意識を共有し、将来への具体策を講じるまちぐるみの魚食推進チーム結成への契機づけを目標としました。

第1部 講義

「Re-Fish 魚を売るコツ、食べるコツ」



講師：
魚食推進有志グループ Re-Fish
代表（水産庁職員）
上田勝彦氏

元漁師であり、現水産庁職員の上田氏は、つまり現場と社会システムの両面から魚食を語れる人物であり、このセミナーは氏の強い説得力をもったプレゼンテーションにより、受講生の危機意識と問題解決の要領理解を大いに高めると共に、第2部での連帯感の促進においても効果を発揮しました。

第2部 魚食交流

「人との繋がりで生まれる氷見の魚の可能性」

水産業の各業種に従事しながら、それほどの交流がない受講生同士の情報交換の場を設け、氷見市の魚食復興に対する具体的なプランを話し合いました。



セミナー④

「氷見温泉郷の未来を創造しよう」

氷見は“食べるまち”で“温泉”に観光目的はありません。しかし温泉の利活用は観光振興財源に直結しており、観光発展を図る上で更なる施策が必要です。このセミナーは、当事者である温泉宿泊事業者と、支援側である行政、関係団体の支援担当者を集め、観光客動向や他地域の温泉活用例を学び、行政の観光振興施策の現状を再検討しながら、温泉事業者と支援側行政、関係団体との連携を促進することを目指しました。

第1部 講義

「温泉地の動向と活性化策」



講師：
大阪観光大学
教授（観光学部長）
浦達雄氏

浦氏は学術的に温泉や旅館経営を研究する一方、いち観光客として温泉ファンの一面を持っており、観光資源としての温泉の動向に対し、経営者とユーザ、それぞれの視点で見解が語られた。しかし、結論として温泉要素の新たな付加価値付けは難しく、手詰まりな現状が語られる結果となりました。

第2部 報告と自由討議

「富山県、氷見市の支援事業と入湯税について」

行政側がその内情を晒し、税収活用の改善策などを議論し、事業所との連帯を図る計画でしたが、事業所の追求に対する返答が煮え切らないものとなり、結果的に行政と民間との関係性に変化は講じられませんでした。